

青少年育成センターだより

第87号 2020.4.1

防府市教育委員会生涯学習課

青少年育成センター

0835-23-3013



「春風や 闘志いだきて 丘に立つ」 高浜虚子

（丘の上で春の暖かな風を全身に感じながら、これからまたたくましく闘おうと決心しています）

新年度が始まり、「今年度もやるぞ」と意欲満々な人にこの俳句を送ります。新型コロナウイルスに負けないようがんばろう。

叱ることを放棄してはいけない

子どもに対して体罰や虐待は、絶対にしてはならないことです。

しかし、子どもを叱ることを躊躇してはいけません。「最近、子どもを叱らない親が多くなった」という言葉をよく聞きます。叱ることは体罰や虐待とは違います。叱ることは、子どもがしてはいけないこと、自分や相手を傷つけることをしてはならないことを教えるうえでとても大切な行為です。

・・・私たちの子どもも共に一緒になって、毎日より高い理想を目指して歩いていく姿が、ほんとうの教育の姿ではないでしょうか。私たちは子どもと共に、日々育っていくのです。そこには真の「愛」というものがあるのです。私の娘なども、反抗期の年頃には「お母さんなんか嫌いだ」「ママなんか死んでしまえばいいのに」などと、ひどいことを言うことがありました。それでも母親は、必死になって怖い顔をして、叱り続けてきました。

子どもが大切だからこそ、「あなたがその道を歩いてしまったら取り返しがつかないのよ」「あなたが今やっていることは、いけないことなのよ」「それをしていたら、あなたが不幸せになるんですよ」と、私たちは子どもを叱るべきなのです。子どもの方から言えば、お父さん、お母さんから叱られているということは自分が大切にされているということなのです・・・

（「子どものほめ方・叱り方～伸びる子が育つ44のヒント～」 浜尾 実）

叱るだけではいけません。また、ほめるだけでもいけません。ほめることと叱ることは、子どもを躰けたり、教育したりする上での両輪となるものです。子どもは、親のほめ言葉や叱責の言葉によって、善悪の判断を身につけ、自分の感情をコントロールしていくことを覚えていくものです。

叱ることは、気持ちいいものではありません。そこで、親は叱ることに躊躇しがちになるのです。しかし、子どもが「命を大切にしないとき」「人をいじめたとき」「嘘をついたとき」「卑怯なふるまいをしたとき」等、してはいけないことをした時には、その場ですぐに叱らなくてはなりません。子どもがいけないということを理解することにより、将来よりよく生きていくことができるようになるのです。その時に叱られず、悪いということをつかからないまま成長したらとすればどうでしょうか。子どもはよりよく生きていけなくなります。ここに叱ることの意義があるのです。

みなさんは叱ったあと、「あんなにきつく叱らなければよかった」と自己嫌悪におちいることがありませんか。私も、子育ての間はそのような思いを何度もしました。では、叱ったあとはどうすればいいのでしょうか。叱ったあとは必ずフォローをすることです。

「叱ってごめんね。でもお母さん（お父さん）が言ったことは大切なことなのよ。これからは気をつけようね」という一言でいいのです。できればハグもあるとよいでしょう。親子のよい関係にはこのことが大切なのです。

（文責＝青少年育成センター指導員 藤村）